

『地域住民を主体とした、狭商圏型調剤併設ドラッグストアと医療機関によるセルフ・メディケーションの推進』

【目的】

昨今、本邦の医療・保健制度の崩壊が叫ばれる中で、医療費削減が最大かつ危急の課題となっており、患者自身がセルフ・メディケーションにより自らの健康を管理し、将来的な医療費を抑えることが期待されている。そういった中で、利便性と立ち寄りやすさを特徴とする「ドラッグストア」という業務形態が、患者の健康に寄与できる可能性は大きい。また、2010年、厚生労働省医政局長通知「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」において、「医療の質の向上及び医療安全の確保の観点から、チーム医療において薬剤の専門家である薬剤師が主体的に薬物療法に参加すること」が求められた。その中で、薬剤師を積極的に活用すべき業務のひとつとして「薬剤の種類、投与量、投与方法、投与期間等の変更や検査のオーダーについて、医師・薬剤師等により事前に作成・合意されたプロトコールに基づき、専門的知見の活用を通じて、医師等と協働して実施すること」「薬物の血中濃度や副作用のモニタリング等に基づき、副作用の発現状況や有効性の確認を行うとともに、医師に対し、必要に応じて薬剤の変更等を提案すること」があげられた。これはすなわち、米国において実践されている CDTM(Collaborative Drug Therapy Management、共同薬物治療管理)がわが国でも求められはじめていることを示唆している。我々は、セルフ・メディケーションの推進と適切な受診勧奨、またチーム医療への貢献を目的とし、薬局での指頭血採取による薬物治療モニタリングを行った。「狭商圏型調剤併設ドラッグストア」という当社の形態を活かした、地域住民・ドラッグストア勤務薬剤師・医療機関の三者によるプライマリ・ケアの推進は、地域住民の健康に対する意識の啓蒙と、医療崩壊の歯止めと成り得る、これまでにない試みといえるだろう。

【方法】

①当薬局系列店でワルファリンによる抗凝固療法を施療中の患者のうち、本研究の主旨に同意を得た患者に対し、指頭血採取によって PT-INR を測定した。測定には、広島大学薬学部臨床薬物治療学教室より貸与を受けた血液凝固能測定器（コアグチェック®）を使用し、指頭穿刺は患者自身により行った。医師への処方支援と適切な薬物治療のため、測定結果は迅速に医療機関へフィードバックした。

②同様に、自己穿刺により採取から全血からヘマトクリット値を測定し、貧血の簡易検査を行った。測定には同研究室から貸与したヘマトクリット用キャピラリーと遠心機を用いた。

【結果】

①ワルファリン服用患者 12 名に対し、合計で 52 回の PT-INR 測定を実施した。そのう

ち、有効な治療域を逸脱していた件数 24 回であり、測定の結果を受けて処方変更となった件数は 12 件であった (図 1)。そのうち治療域からの逸脱の多い症例から、関節リウマチによる ADL 低下によって服薬アドヒアランスが低下していることを発見し、調剤方法の工夫によりアドヒアランスの改善を図れた事例もあった。

②日頃から貧血気味と訴える成人女性 15 名に対し、ヘマトクリット測定を実施した。そのうち 2 名で、基準値以下の測定結果が出たため、管理栄養士からの食事上のアドバイス、美容部員からの血色を良く見せるためのメイクのアドバイスを伝え、また必要に応じて薬剤師からの受診勧奨を行った。

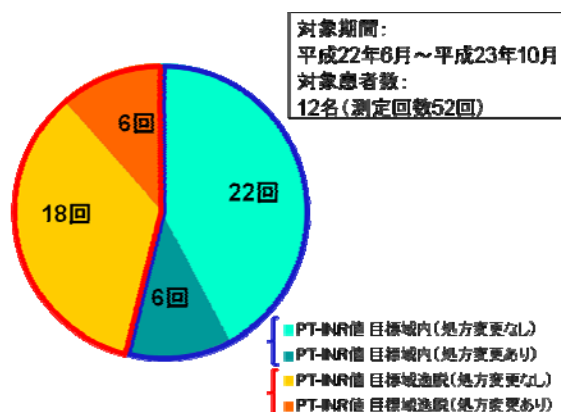


図 1.PT-INR 値測定結果

【結論】

本研究により、地域薬局における薬物治療モニタリングが、医師の診療補助として貢献できることが示された。また、薬剤師による PT-INR 測定は薬物治療における医師および患者とのコミュニケーションツールとしても有効であり、検査値が簡便かつ気軽に手に入ることで患者自身の関心を高め薬物治療に対する意識を向上させることにも成功した。

成人女性の約 1 割が鉄欠乏性貧血と言われており、潜在的な貧血治療の需要は高い。簡易的な貧血スクリーニングは、患者の健康な生活のための一助となる可能性が示された。また、管理栄養士や美容部員など、様々な専門性を持ったスタッフが各々の知識を活かし患者にアプローチできたことは、ドラッグストアにおいてこのような検査を行うことの有用性を示しているのではないだろうか。

近年、公的医療保険加入者全員を対象とした特定健康診査・特定保健指導の義務化など、医療費削減に向けた取り組みは各地で行われている。しかし、その結果としての検査値を患者が簡単に確認できる仕組みはまだ少ない。セルフ・メディケーションの主語となるのはあくまで患者自身であり、患者がより医療と健康に関心を持たなければ本懐は遂げられないだろう。今後、微量血採取により脂質や尿酸値など患者の関心の高い血清生化学検査がより簡便に行えるようになれば、セルフ・メディケーションに対する意識はますます高まるはずである。現在我々はそれに向けて、広島大学薬学部臨床薬物治療学教室と共同し、

微量血採取による生化学データの解析に着手している。地域住民の生活に根差し、健康を補助する立場にあるドラッグストアにおいて、自身の検査データを簡単に入手できることの意味するところは大きく、患者の主体性を核とした、チーム医療を推し進める原動力となると確信している。